

佐久市英語教育推進計画（骨子案）

佐久市教育委員会

令和7（2025）年3月

目次

1	計画策定にあたって.....	2
2	計画策定の背景.....	3
3	佐久市における英語教育の現状と課題.....	6
4	佐久市の英語教育の目指す姿.....	9
5	施策ごとの目標.....	10
6	基本計画.....	11

1 計画策定にあたって

(1) 計画策定の趣旨

グローバル化が加速度的に進展する中、文部科学省は平成25年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表しました。この計画では、小学校中学年からの外国語活動の実施、小学校高学年の教科化、中学校英語教育の高度化等が示されており、この内容を踏まえた学習指導要領が小学校では令和2年度から、中学校では令和3年度から全面実施されています。

本市では、これらの大きな変革を受け、令和4年度に策定した「佐久市教育振興基本計画」において、施策の方針の一つに「急激な社会変化とグローバル化に対応した教育の推進」を掲げ、英語教育の推進に取り組んできました。

しかしながら、令和5年度の全国学力・学習状況調査における市立中学校3年生の英語の結果が全国平均を下回るなど、国を挙げた大きな変革に十分対応できていない現実があると考えています。

そこで、様々な社会情勢の変化や、学校における英語教育に係る課題に対応し、本市における小中学校の英語教育をより着実に充実していくため「佐久市英語教育推進計画」を策定します。

(2) 計画の位置づけ

この推進計画は、「佐久市教育振興基本計画」を踏まえ、本市の英語教育の推進・充実を目的として、小中学校の英語教育における具体的な方策や施策を示したものとします。

(3) 計画期間

計画期間は、令和7年度（策定の時）から令和11年度までとし、佐久市教育振興基本計画（計画期間令和5年度から令和8年度まで）の改定及び学習指導要領の改定に向けた国の動向（中央教育審議会に対して文部科学大臣は令和6年12月に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」を行っています。）も勘案し、適宜改定等を行うこととする。

2 計画策定の背景

本計画を策定するのに当たり、英語教育をめぐる社会情勢の変化を整理します。

(1) 英語教育に係る社会情勢の変化

ア 更なるグローバル化の進展

交通手段の発達だけでなく、ICT技術の進展により、グローバル化が急速に進展する中、外国語、特に国際的な共通語である「英語」によるコミュニケーション能力は、一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたり様々な場面で必要とされることが予想されています。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大の終息とともに訪日外国旅行客数は飛躍的に回復・増加するとともに、少子高齢化に伴う労働力人口の減少などを背景とした、外国人労働者数の増加も顕著化しており、日本に住んでいても、英語を使用する機会は増えていくことが予想されています。

今後、本市において、市が発展していく中において、世界との距離はますます近くなり、人・モノの交流は頻繁になっていくことから、英語は世界と繋がるツールとして、英語によるコミュニケーション能力は、このグローバル化社会を生きていくために必要とされる能力として、それぞれ身に着けることが求められています。

イ ICT、AI技術の急激な進化

近年、AIをはじめとする新たな技術が飛躍的に進化しており、こういったテクノロジーを使いこなす、活用していく能力も必要となっています。

特に、生成AIを活用した自動翻訳機の開発も進んでおり、手軽に質の高い翻訳が可能となってきています。

しかしながら、新たなものを生み出す創造力や発想力、またそれを具体化するために欠かせない他者とのコミュニケーション能力は、人間にしかできないものであり、これからの英語教育においては、自己を確立しつつ、違う文化を持つ他者を理解・受容し、自らの考えを積極的に発信できるコミュニケーション能力を身に付けることが求められています。

ウ VUCAの時代の到来

現代社会は、多様な社会変化が同時に起き、特に災害や新型コロナウイルス感染症のパンデミックによる社会変化のような、予測不可能な未来がこれからの社会の本質的な特徴であるといえます。

このようなVUCA（Volatility（変動性）・Uncertainty（不確実性）・Complexity（複雑性）・Ambiguity（曖昧性））の時代を、生き抜いていくには、一人ひとりが望む未来を自ら示し、切り拓き、作り上げていく必要があります、この時には、言語による壁をなくし、世界中の人々とコミュニケーションをとりながら、これからの時代何が必要なのか、世界とともに考えられる力を身に着ける必要があります。

（2）国における英語教育の動向

ア グローバル化に対応した英語教育改革実施計画

文部科学省は、平成25年12月に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、初等中等教育段階からグローバル化に対応した教育環境づくりを進めるため、小学校における英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など、小・中・高等学校を通じた英語教育全体の抜本的充実を図るとしています。

本実施計画では、英語教育の目標を、小学校中学年では、「英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで、コミュニケーション能力の素地を養う」、小学校高学年では、「読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う」、中学校では、「身近な事柄を中心に、コミュニケーションを図ることができる能力を養う」とし、小学校高学年では教科型での授業の実施、中学校では、授業を英語で行うことを基本とし、内容に踏み込んだ言語活動を重視するとしています。

イ 現学習指導要領

文部科学省は、「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を踏まえ、平成29年3月に新たな学習指導要領を公示し、小学校は令和2年度から、中学校は令和3年度から現在の学習指導要領が全面実施されています。

本学習指導要領では、小学校中学年では外国語活動を行うこととし、その目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働か

せ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を育成することを目指す」としていません。

また、小学校高学年では、外国語を教科として行うこととし、その目標を「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」としています。

更に、中学校では、外国語科の目標を、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを目指す」としています。

(3) 佐久市における英語教育について

ア 佐久市における英語教育の取組

本市では、少子高齢化による人口減少、情報化社会、グローバル化や多極化、そして地球環境問題などがこれまで以上に進行することが予測されるとともに、先行きが不透明で、将来の展望が非常に困難な時代を迎えようとしている中、数々の教育課題に適確に対応するため、令和4年度に本市の教育施策の方向性を総合的かつ体系的に示す、新たな「佐久市教育振興基本計画」を策定しました。

この中において、新たな学習指導要領に基づき大きな変革の時期を迎えた英語教育についても、その施策の方針を「急激な社会変化とグローバル化に対応した教育の推進」とし、小中学校の英語教育を推進するための行動計画（本計画）の策定やALT更なる活用、英語教育を通じたコミュニケーション能力の育成、英語を取り入れた体験活動の実施などに取り組むとしています。

英検3級相当の生徒の割合が全国と比較して低いが、英検を受けている生徒の絶対数が少ないので、受けている生徒における合格者の割合が低いとは言えない。佐久市の子どもたちはかなり健闘していると言える。この部分は削除したらどうか。(西村委員)

3 佐久市における英語教育の現状と課題

次に、佐久市における英語教育の現状と課題を整理します。

(1) 英語力について

まず、令和6年度に行われた全国学力・学習状況調査においては、中学校3年の英語におけるすべての領域について、本市は全国平均を下回る結果となっています。

特に、本市の生徒は「話すこと」、「書くこと」を苦手とする傾向があり、英語で発信（アウトプット）する力に課題があると考えられます（全体を通じた課題）。

次に、文部科学省が行っている英語教育実施状況調査では、本市における英検3級相当のレベルに達している生徒の割合は、全国と比較して低い状態となっています（授業改善における課題）。

また、英検等の外部試験を受けている生徒については、全国より英検3級以上を取得している生徒の割合（市：約73% 全国：約61%）が高くなっていますが、受験している生徒の割合が低く、保護者も含め英語を学ぶことへの必要感が持っていないことが考えられます（生活環境における課題）。

更には、こういった調査の結果など客観的なデータに基づく授業改善の取組などがまだまだ浸透していない現実があり、今後の市全体、学校ごとの取組に生かしていく必要があります。（授業改善における課題）。

表1 中学校生徒の英語力の状況（%）

	内 容	佐久市	長野県	全 国
A	外部試験（英検等）を受験したことがある生徒	21.7%	38.9%	45.7%
B	Aのうち、CEFR A1レベル相当（英検3級）以上を取得している生徒	15.8%	24.8%	27.8%
C	CEFR A1レベル相当以上の英語力を有していると思われる生徒	12.5%	29.9%	24.5%
D	B+C	28.2%	54.7%	52.4%

令和6年度英語教育実施状況調査

令和6年度の実施状況調査の数字に代わっています

(2) 授業における言語活動について

文部科学省が行っている英語教育実施状況調査では、本市における授業における英語による言語活動の時間の割合は、特に中学校において、全国と比較して低い状態となっています。

新たな学習指導要領に則した指導がまだまだ浸透していない状況が伺えます（授業改善、小中連携、教員の指導における課題）。

表2 授業における、児童生徒の英語による言語活動時間の割合（％）

	内 容	市	県	国
1	（中学校）50%以上の時間、言語活動を行っている学校	52.4	89.4	75.1
2	（小学校）50%以上の時間、言語活動を行っている学校	92.9	93.4	94.4

令和5年度英語教育実施状況調査

(3) 小中学校における連携について

新たな学習指導要領において、小学校で英語が教科化されたことにより、英語教育においても小中の連携が重要となっています。本市では、中学校区内で教員が互いに授業を見合う取組や、小中学生間で英語での手紙のやり取りを行う取組などを実施しています。

しかしながら、小学校、中学校間で英語教育の指導方針や到達点が十分に共有されておらず、中学生になって急に英語が難しいと感じる生徒もいるなど、引き続き連携した取り組みを進めていく必要があります（小中連携における課題）。

(4) A L Tの活用について

本市では、現在9名のネイティブスピーカーであるA L Tを雇用し、チームティーチングによる授業を全ての小中学校で実施しています。

日本の生活に不慣れなA L Tもいることから、A L Tコーディネーターを配置し、授業等に集中できるよう生活支援も実施しています。

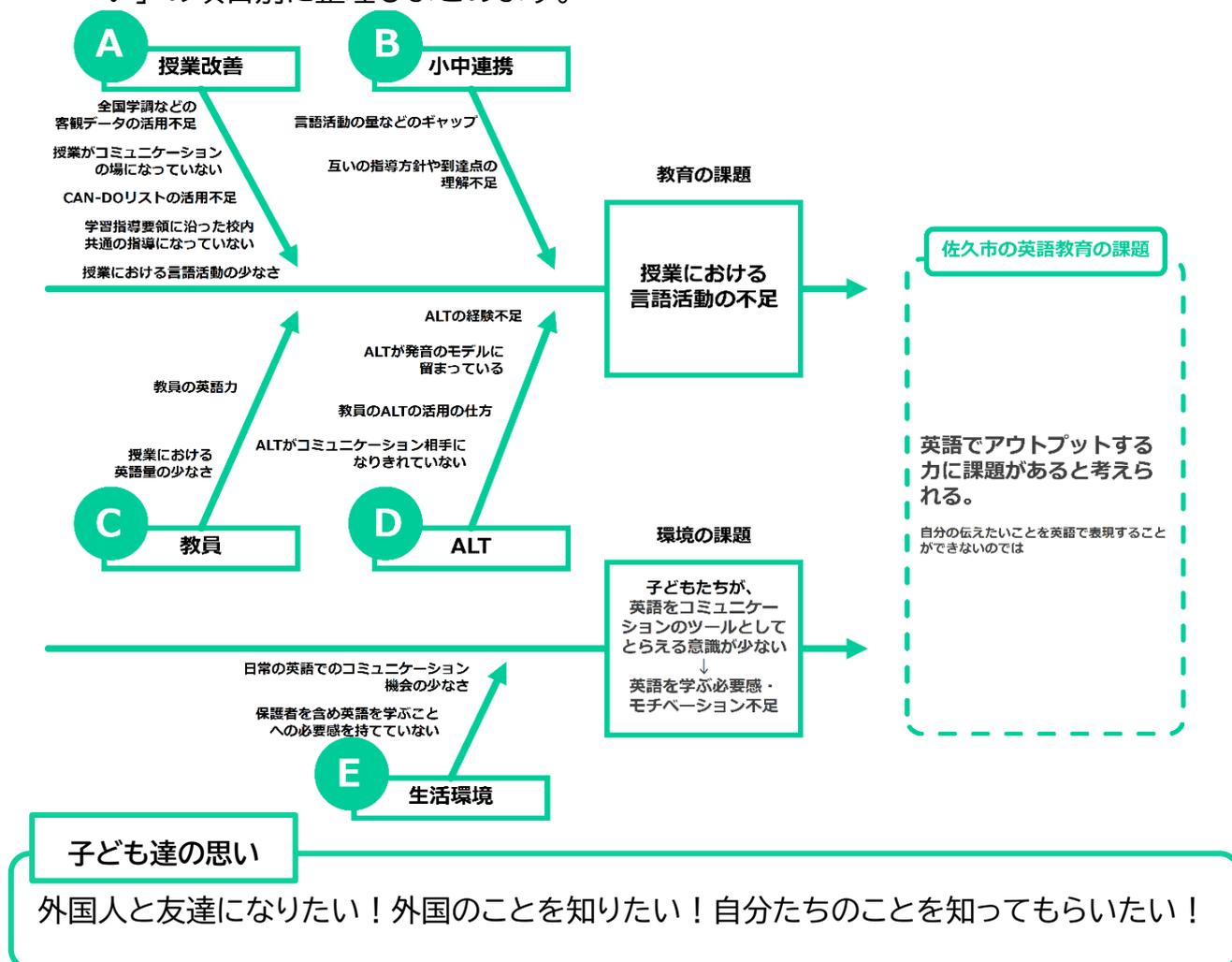
児童生徒の言語活動の相手となることや、そもそも子どもとの接し方等、経験が乏しいA L Tもいるため、より効果的な言語活動を中心とした授業ができるよう、研修などA L Tの活用についても取り組んでいく必要があります（A L Tにおける課題）。

(5) 子ども達の外国に対する思いについて

令和5年度全国学力・学習状況調査においては、「外国人と友達になったり、外国のことについてもっと知りたいと思いますか」という問いに、小学6年生の約73%、中学3年生の約67%が、「日本やあなたが住んでいる地域のことについて、外国の人にもっと知ってもらいたいと思いますか」という問いに、小学6年生の約82%、中学3年生の約65%が、当てはまる、または、どちらかといえば当てはまると回答しており、この結果は全国の平均と同じか、それを上回るものであり、外国人と接する機会が少ない本市の子ども達も、潜在的に外国の人と仲良くなりたい、知りたい、または自分たちを外国の人に知ってもらいたいと考えており、この子ども達の思いを大切にしていく必要があります。(子ども達の思い)。

(6) 現状と課題の整理

本市の英語教育における現状と課題をAからE及び「子ども達の思い」の項目別に整理しまとめます。



4 佐久市の英語教育の目指す姿

ここまでまとめた、佐久市における英語教育の現状や課題から佐久市の英語教育の目指す姿を定めます。

佐久市の子ども達の思い

外国人と友達になりたい！一緒にゲームやスポーツがしたい！
⇒世界の人々とコミュニケーションをとりたい（考えを理解したい）！！

外国に行って現地の生活を知りたい！世界遺産を見に行きたい！
⇒世界（国、人や文化）を知り学びたい！！

世界中の人に自分達を知って欲しい！私の思いを聞いて欲しい！
⇒自分の考えや思いを多くの人に発信したい！！知ってもらいたい！！

佐久市の英語教育の課題

英語で自分の思いをアウトプットする力

英語は世界への扉であり、子ども達は本能的にその先を見たい、行きたいと考えている（子ども達の思い）。でも、英語で自分の思いを伝えられない、表現できない、コミュニケーションが取れない（佐久市の英語教育の課題）。英語が子どもの未来の可能性を狭めているのでは。



子ども達の本来持っている純粋な思いを育み、それを英語で発信（アウトプット）する能力、伝え合う能力を育てることが、子どもたちの未来の可能性を世界に広げていくスタートになることから、佐久市立の小中学校における英語教育の目指す姿を下記のとおり定めます。

佐久市立の小中学校における英語教育の目指す姿

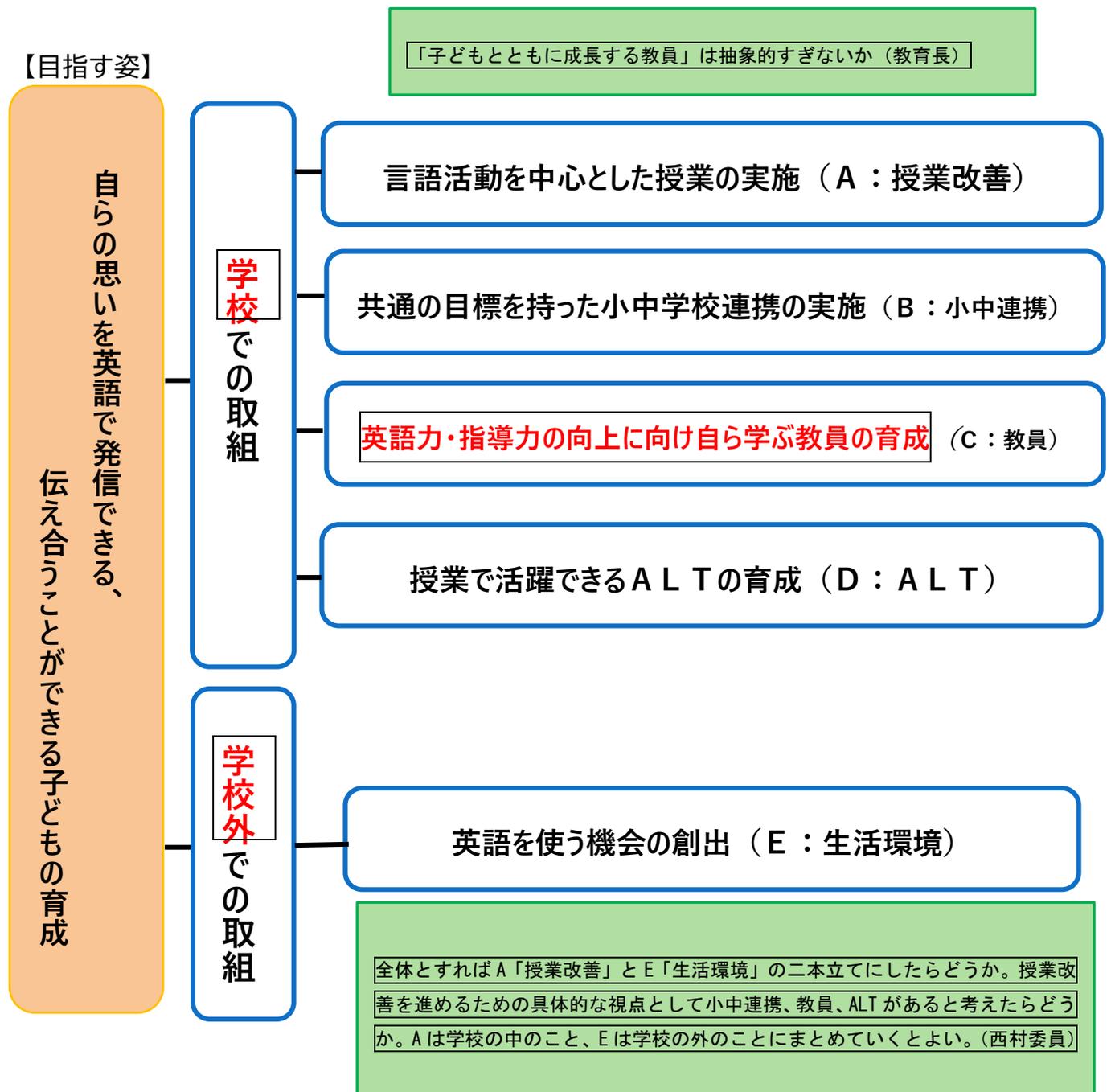
自らの思いを英語で発信できる、伝え合うことができる子どもの育成

5 施策ごとの目標

(1) 施策ごとの目標

佐久市の英語教育の目指す姿を実現するため、佐久市における英語教育の課題ごとに施策の目標を定めます。

また、それぞれの施策に立案、実施においては、ただ英語を教えるということではなく、英語を使って私はこうしたい・こうなりたいという児童生徒の思いや、その思いを実現するために必要なコミュニケーション能力を育むことに視点を置くよう努めます。



6 基本計画

(1) 言語活動を中心とした授業の実施（A：授業改善）

児童・生徒が英語でアウトプットするためには、言語活動を中心とした授業が不可欠です。そのために授業を見直し、改善を図ります。

ア 明確な Today' s Goal と feedback の実施

- ・児童・生徒の身につける力を明確にし、見通しを持った学習にするために、目標と評価を授業の中で位置付けます。
- ・授業では他者を意識した lesson goal を設定し、言語活動を取り入れて相手とつながれることの良さを実感できるようにします。
- ・児童や生徒が自分の学びがわかるように自己評価カードを使用します。

イ small talk や帯活動の継続と充実

- ・授業開始時に英語のリズムを作るために、small talk を繰り返し行い、子ども同士で自分の考えや思いを表現するなどの活動の時間を確保します。

ウ AI アプリ、デジタル教科書、ヘッドフォン、ピクチャーカードなどの利用による、効果的な練習や学習ができる環境づくり

- ・AI アプリやヘッドフォン等の利用により、授業での効率的な発話機会の創出や、英単語や発音の確認など反復（繰り返し）学習をサポートする環境を検討します。

エ ペアやグループ活動による学習の充実

- ・英語が得意な児童や生徒、苦手な児童や生徒も効果的に学習できるよう、ペアやグループ活動などの充実を図ります。

オは優先順位が低い項目になります。

オ 英語の授業づくりのためのガイドラインの作成

(2) 共通の目標を持った小中学校連携の実施（B：小中連携）

小学校3年生から中学校3年生までの7年間を見通して、継続した学習を行い、小中学校のギャップをなくしていきます。

ア 小中学校で手軽に行える学習内容の相互配信や中学校教員による出前授業等の実施

- ・相手意識をもって学んだことを発信できるように、中学校区の小中学校において、手紙やビデオレターなどを交換します。
- ・中学校区での中学校教員による出前授業、英語授業の相互参観を実施し、子どもの実態に合わせた授業について理解を深めます。

イ 小学校から中学校につながる small talk の会話の型の定着

- ・小学校では、教科書のモデル文をベースにして、他者を意識した対話を行い、中学校では対話の内容を深めていき、small talk を継続します。

ウ 佐久市 CAN-DO リストの運用

- ・小学校3年生から中学校3年生までを通して、どのような力を身に付けるのかを、教員も児童・生徒も理解できるように「佐久市 CAN-DO リスト」を運用します。小学校中学年の「聞く、話す」から、小学校高学年及び中学校の「読む、書く」活動に段階的に進めるようにします。

エ 小学校高学年から英語検定など外部試験の受験の奨励

- ・外部試験を通して自分の英語の力がどのくらい身に付いているのか客観的に測り、英語への学習意欲の向上につなげます。

(3) 英語力・指導力に向け自ら学ぶ教員の育成 (C:教員)

英語教育の推進は授業を担当する教員の英語力・指導力が非常に大きな鍵となります。しかし、小学校の担任が教える場合、系統的に英語の指導方法を学んでいることが少なく、中学校の教員でも言語活動を中心とした授業力の向上が必要です。

ア 佐久市内外の先進校の授業視察の実施

- ・英語教育の先進校の授業視察を行い、言語活動を中心とした模範的な授業を参観することで、授業力の向上を図ります。

イ 授業力向上のための研修の実施

- ・英語授業担当者部会や佐久市学事職員会外国語外国語活動委員会と協力し、指導力及び英語力向上に関わる研修を実施するとともに、授業力の向上に効果的な教材や指導方法等の情報を収集し、その活用に努めます。

ウ 小学校英語専科教員の増員

- ・より質の高い英語授業の提供を目指し、小学校英語専科教員の体制強化を進めるとともに、同時に、英語教育における市費学力向上支援員などの配置を検討します。

エ 英語担当指導主事による授業の巡回指導

- ・ALTも含めた英語の授業について、英語担当指導主事が小中学校を参観し、指導や助言、サポートを行います。

(4) 授業で活躍できるALTの育成 (D:ALT)

小学校3年生からNative Speakerの英語に触れて、英語を聞いたり話したりする力をつけるためにも、ALTが効果的な授業ができるよう育成する必要があります。

ア ALT研修の実施や生活のサポート

- ・英語担当指導主事が中心となり、年間を通じたALTの研修を行い、英語教育の改善及びALTの生活全般にわたる支援を行います。生活の支援に当たっては、ALTコーディネーターも協力して行います。

イ ALTの増員

- ・児童・生徒がより多くの授業で英語に触れるようにするために、ALTの増員を検討し、児童・生徒との関わりや授業者との打ち合わせの時間を確保します。

ウ ALTリーダーの育成

- ・経験豊富なALTに、ALT研修の立案や講師、新規ALTのメンター（相談や指導役）の役割を与え、実践を通じたALTリーダーの育成を進め、ALTの資質や授業改善や、学校や教育委員会事務局との円滑な情報共有を図ります。

エ チャレンジタイムの実施

- ・複数のALTが1校に集まり授業を行うことで、他のALTの授業の方法、児童・生徒への対応などを研修する機会を作ります。

(5) 英語を使う機会の創出 (E 生活環境)

ア 地域に住む外国人や海外の学校との交流

- ・来日しているA L Tの家族や地域在住者などの学校外の外国人との関わりや、海外の姉妹都市との交流など、異文化交流を行う機会を作ります。

イ 地域英語協力者の活用

- ・英語に精通している地域在住者に、「地域英語協力者」として小学生の英語授業に参加していただき、児童・生徒の英語学習のサポートや、より多くの発話の機会を作ります。

ウ English Camp in Saku の開催

- ・自然の中での活動を通して、外国人講師やA L Tなどと英語でコミュニケーションをとり、英語を身近に感じ、親しむきっかけをつくり、学習意欲を育てます。

エ、オは優先度が低い

エ 「英語を使ったスピーチや学習成果の発表の機会の創出」

オ 「市内公共施設における英語掲示物の充実」